

## 予防原則を基点におく環境保護主義者

### 副題：温暖化論争の不思議

環境保護については「予防原則」が採用されています。

この予防原則が採用されているのは、恐らく環境保護に関することだけではないでしょうか。

理由としては、

環境破壊が起こる恐れがあり、いったん環境破壊が起これば、修復不可能になるか、修復可能だとしても莫大なお金がかかる。ということです。しかしながら科学の世界では、この「予防原則」は、「稀なことである危険が発生しないことの証明はできない」といわれ、「悪魔の証明」と言われています。これを環境保護では採用しているわけです。不思議ですね。

今、旬な話題として、「地球温暖化は二酸化炭素が主因であり、このままでは地球は破滅する」として、世界を恐怖に陥れていることがあります。

「予防原則」を理由として、環境保護で大きく動いているのが、「地球温暖化は二酸化炭素が主因である」という主張です。2007年のIPCC報告以来地球シミュレーションとして温暖化を予測してきましたが、この80年後の2100年にこの事実を目で見ることのできる「温暖化は二酸化炭素であるという主張者」が誰も生きていない、という事実。これは、不誠実な予測ではないでしょうか。責任を持つなら、なぜ、2020年や2030年、2040年や2050年の途中の危険性を具体的数値で表明し、予測であるシミュレーションの妥当性を問わないのでしょうか。不思議ですね。こういう点に疑問を感じます。今の人は誰も生きていない80年後の2100年の予測で世界を恐怖で脅すのでしょうか。なぜ、地球の平均気温が、温暖化ガス（二酸化炭素が主）が最善に抑えられた場合でも、0.3~1.7°Cの上昇、最悪の場合には、最大4.8°Cの上昇と予測して、恐怖心をあおるような表現をとるのでしょうか。これは、いかがわしい宗教の勧誘と同じと感じます。この「気温上昇シミュレーションの真実」や、「二酸化炭素の増加が先か気温上昇が先か」、というようなことに疑問を感じずにはいられない。こういう心持の日々です。